

旬花報

20号

発行 2022.3.31

群馬県立女子大学
同窓会事務局

〒370-1193
佐波郡玉村町上之手1395-1
TEL: 0270-65-8511
URL: http://shiou-kai.com/



同窓会長
野村 留美子

令和三年十二月二十六日、NHK大河ドラマ「青天を衝け」の最終回が放送されました。

主人公・渋沢栄一の故郷の方言である武州ことば。そのセリフを監修したのが、同窓生の新井小枝子さんです。放送終了後の現在の心境をお寄せいただきました。



新井 小枝子
(文学部国文学科八期生)

大河ドラマの「ことば指導」を終えて

NHK大河ドラマ第六十作目「青天を衝け」。脚本は大森美香さん。物語の時代設定は幕末から近代。主人公は渋沢栄一。近代資本主義の父と称されている人物だ。

私は、この作品に、「武州ことば指導」として参加しました。令和三年一月から十二月にかけて、多くのみなさまに放送をご覧いただきました。ありがとうございました。

「青天を衝け」の主人公渋沢栄一は、武州血洗島で生まれ育ちました。この人物を、方言研究者として説明すれば、言語形成期（生まれてから十四、五歳までの間）を武州血洗島のことばにさらされて育ち、当地のことばを母語とする男です。英語やフランス語といった外国語も話したであろう人物ですが、「武州ことば」こそが、彼の一生においてもっとも自由に使いこなせることのできた言語ということになりましょう。

ドラマのなかで、小さい栄一を演じた小林優人くんと、大きい栄一を演じた吉沢亮さんをはじめ、血洗島の人々を演じた俳優さんたちは「武州ことば」によって、かつてそこにあった時代と空間をかたちづくってきました。私になった「武州ことば指導」とは、ドラマの全体からみればほんの一部にすぎないささやかな仕事ですが、大河ドラマという大所帯の中に身を置いて、一瞬一瞬を緊張しながらすごしました。俳優さんをはじめ、さまざまな指導の先生方と一緒にすることができ、貴重な体験になりました。

さて、ドラマは、ナレーションによって語られる部分もありますが、多くの部分は会話の連続によって物語が展開していきます。その会話は音声です。しかし、台本の中にある会話は、当然のことながら文字のみです。音声言語である方言、すなわち「武州ことば」も文字によって記されています。大森美香さんの描く世界を自分の心の中に取り込みながら、必要とされる部分の「武州ことば」を、文字で記して提案するのがまず最初の私の仕事です。その文字にはことばのかたちしかありません。それゆえに、物語の世界は、紙の上でまだねそべっている感

があります。そのかたちが、演出家の指導と俳優さんたちの解釈によって音声になったとき、そこに長短のポーズ（音声のない間）も組み合わせ、人と人との関係性や湧き出でてくる感情など、すべての世界が立ち現れてきます。文字通り、立つて、現れてくるという感じなのです。

私にとって、すべての武州ことばのシーンに思い入れがあります。その中から一つを選ぶのは難儀なことですが、紹介してみたいシーンがあります。第二十三話、尾高惇忠の弟平九郎（岡田健史さん）と、栄一の妹でい（藤野涼子さん）が、結婚を約束する場面です。平九郎が、フランスに旅だった篤太夫（栄一）の見立て養子となり、生まれ育った血洗島をはなれて江戸に発つ、その前に、泣く泣く追いかけて。

・・・ てい、泣いている。

平九郎 「おてい」

てい 「あの……これ」

平九郎 「守り袋。俺に作ってくれたんか？」

てい 「そうだに。どうかお元気で……もう

いやだ。最後だから、笑って見送ろう

と思つたんに、なんでだんべ……」

・・・ 平九郎、ていを抱きしめる。

てい 「！」

平九郎 「おてい……俺は、いつかおめえを嫁に欲しい」

てい 「ええー！」

平九郎 「栄一さんが無事に帰^{けえ}つて来て、もう

跡継ぎは案じるこた^{ええ}ねえってことになつたら、俺はここに帰^{けえ}つてくる。

そしたら、俺の嫁になつてくれ」

てい 「……」

平九郎 「中の家の叔父さんにダメだと言われるかもしんねえが、でも、俺はおていと一緒……」

てい 「うわーん！」

平九郎 「バカ、泣くな。みんなに聞こえるに！」

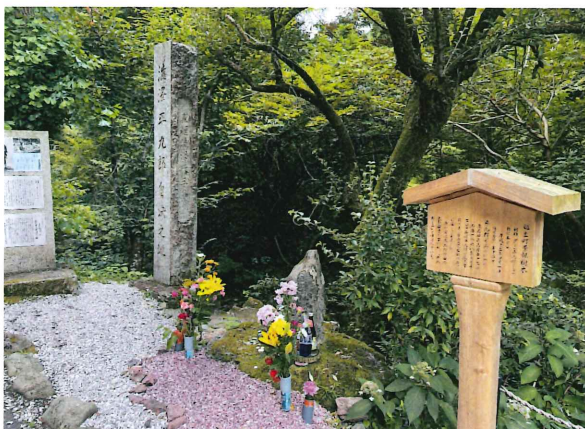
てい 「だって嬉しくつて……平九郎さーん、うわーん」

・・・ 平九郎、てい、おでこゴツッン

放送されたシーンを観ながら、あらためて文字化してみました。このシーンには、へおでこゴツッンの演出もついて、若い二人のあまくてせつない場面となりました。必ず帰ってくることに約束した平九郎でしたが、このあと、帰ってくることはありませんでした。

傍線をつけたところが武州ことばに特徴的な形式です。方言で愛の告白、方言で結婚の約束。お互いを思いやる方言でのかたい誓いに、なんともいえないぬくもりが立ち現れてきます。方言で表現するには意外な内容なのかもしれません。しかし、平九郎とていにとつての、ほんのつかの間の幸せがそこにあったことを表現するための、必要で十分な武州ことばであったと思います。

声によって立ち現れてくる世界は、かけがえのない一瞬一瞬の彩りがあります。声とは、ことばを醸し、立ち上がらせる、その源なのだとすることを思い知る仕事となりました。大学卒業後も、大学での学びに連なるおもいがけない出会いを、いくつとなく経験してきました。私にとって、もう三十年も前になる大学生活。その延長線上に、また一つ、宝ものが積み重なりました。（群馬県立女子大学教授）



渋沢平九郎自決の地（埼玉県越生町）

今号の卒業生紹介は、令和二年度文学部英米文化学科卒業のORさんです。

ORさんは、現在マイナビで営業職として勤務しています。ORさんに就職活動の時の様子
と現在の仕事についてお聞きしました。

就職活動を行っていたのはどのくらいの期間ですか。

A 大学三年の夏から始め、大学四年の七月に決定しました。

Q どのような企業を探していましたか。

大学の就活セミナーで、講師の方が「一人でも生きていける力をつけたほうがよい。」とおっしゃっていました。その言葉に影響され、「バリバリ働きたい」と思うようになりました。活動の前半は、業界は絞りませんでした。東京のベンチャー企業を探していました。

三年の冬に受けたインターンシップをきっかけに、人材サービス会社に絞って活動をしていきました。また、東京での就活合宿を通して、バリバリ働きたいという思いはさらに強くなりました。就活合宿は長くて二週間のものであり、トータルすると一か月くらい利用していました。

「辛い」と思ったことはたくさんありました。たくさんあって辛い状態に慣れていきました。悩んだ時は外部の人材アドバイザーに相談して、今後の就活のやり方や方向性を決めていきました。

大事にしていたことは、自分に自信を持つためにとりあえず動くことです。また、友達と情報共有して就活のモチベーションを高めつつ、焦りを感じたらそれを原動力にしていきました。

就活時のイメージと現在の生活とのギャップを教えてください。

自分の思っている以上に仕事を任
 されるということです。入社後、も
 ちろん研修はありますが、営業現場
 はOJTで見て覚えるという流れが
 基本です。決まった型がないのでそ
 の時に応じて自分のやり方で営業で
 きるのは、よくも悪くも驚いた点で
 す。

また、基本的に昼間は営業に出ていて、勤務時間が長く帰社する時間が遅いため、残業は多少あります。もちろん自分で調整できるので、定時上がりもできます。頻度としては週一回くらいです。

会社の規則は、あまり厳しくありません。また、部署にもよるかと思いますが、有給は取りやすいです。若くても、先輩や上司に対して自分の意見が通りやすいのも良い点です。

与えられた環境を全部有効活用したほうがいいと思います。今を楽しむ、全力で生きる、いろいろな人と出会う、いろいろなバイトをしてみる：など。自分が置かれている環境を活用するのか、何もせず楽をするのかは自分自身で選択できます。楽をしているのもいいとは思いますが、今後のことを考えた上でそうすることをすすめます。また、何かを経験した結果が成功であれ、失敗であれ、自分次第でその後のこともどうにかなると思います。大学は、そういった様々な経験をしていく中で、自分自身が譲れない軸やゴールを見つけていく場所だと思っています。大学生活四年間が何も得られない空っぽな期間になってしまうのはもったいないことです。在学生には、講義はもちろんのこと、サークルなど、自分に与えられた環境や時間を大切に使い、その先の就活や将来につなげてほしいと思います。

KDGS 同好会

KDGS 同好会は、国連が掲げる持続可能な開発目標（SDGS）に対して、群馬県立女子大学からアクションを起こしたいという志のもと、二〇二一年に発足した公認同好会である。KDGS は本学の愛称「県女」と、SDGS を楽しく達成したいとの思いから Kenjionable Development Goal の頭文字を取って命名された。

同好会は、コロナ禍という制限のもとでありながらも、内閣府の男女共同参画室が行う「女性に対する暴力をなくす運動」の趣旨に賛同し行われたパール・ライトアップ、生活困窮者等に必要な物資を配布するフードバンクへ寄付する為に食品や日用品を集める「フード＆ライフドライブ」など、県女生ならではの視点を生かした多数の活動で、学内におけるSDGsに対応する意識向上に大きく貢献すると共に、上毛新聞、NHK前橋放送局など様々なメディアで取り上げられ、その活動は高く評価されている。



編集後記

突然、耳慣れない感染症が報道されるようになってから二年が経ちました。大学生の皆さんにとって貴重な学生生活の半分が過ぎたことになります。

思うようにできないことが多く、先の見通せない日々ですが、今置かれた状況でできることを考えることが大切なのかと思います。日々頑張っている学生の皆さんにエールを送ります。